

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 30 年度 第 2 号 2018 年 11 月 26 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

平成 30 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2018 年 11 月 13～18 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は登別～白老沖。
- ・ スケトウダラとみられる魚群反応は、渡島沖で水深 350m以深、胆振沖で水深 300m以深。海底に張り付いた反応は、水深 350～450mにかけて。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに平年よりも高い。とくに、水深 150～200mにかけては、平年よりも 3℃前後高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振沖の 182、184 漁区（登別～白老沖；H～I ラインにかけて）に強い反応がありました（図 1・2）。また、166、167 漁区（静内沖；Q ライン付近）にも比較的強い反応がありました。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を下回り、金星丸による調査を開始した 2001 年度以降では、2001 年度、2002 年度に次ぐ低い値となりました（図 3）。
3. スケトウダラとみられる魚群反応は、主に渡島沖で水深 350m以深、胆振沖で水深 300m 以深に観察されました。海底に張り付いた反応は、渡島・胆振海域ともに水深 350～450mにかけてとなっていました（図 2・4）。
4. 今年度の漁獲物調査は、前年度同様、海底から浮いている魚群を対象とし、中層トロールにより実施しました。その結果、苫小牧沖の水深 410m付近で浮いていた魚群（曳網層：水深 360m前後）は、体長（尾叉長）40～45cm のスケトウダラ成魚が主体となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（南茅部沖）、胆振沖（登別沖）ともに、平年（2002～2017 年度のこの調査における平均値）よりも高くなっていました。とくに水深 150～200mにかけては、平年よりも 3℃前後高くなっており、2016 年 11 月の調査結果とほぼ同様な水温の分布状況となっていました（図 6）。

なお、次回の調査は年明け後の 1 月中旬（2019 年 1 月 15～23 日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

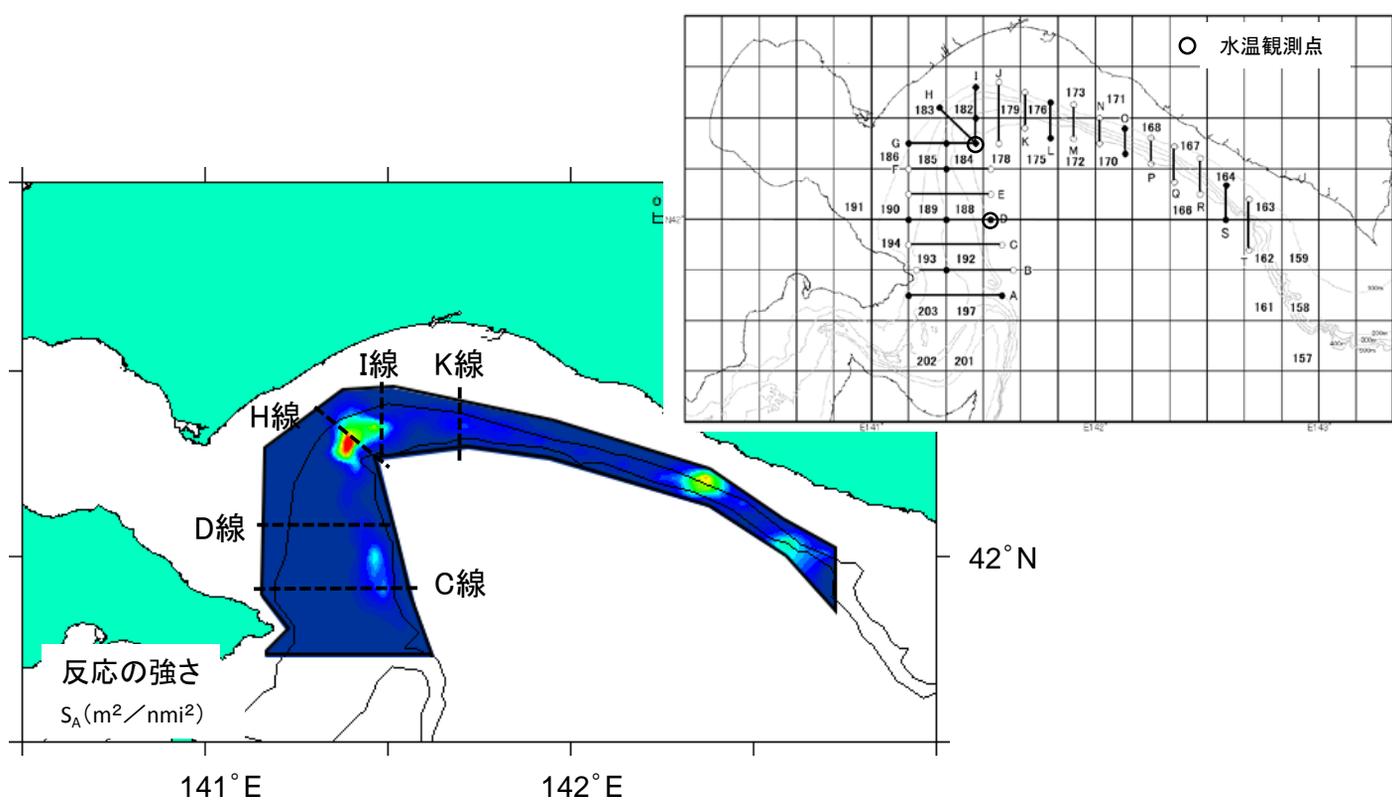


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

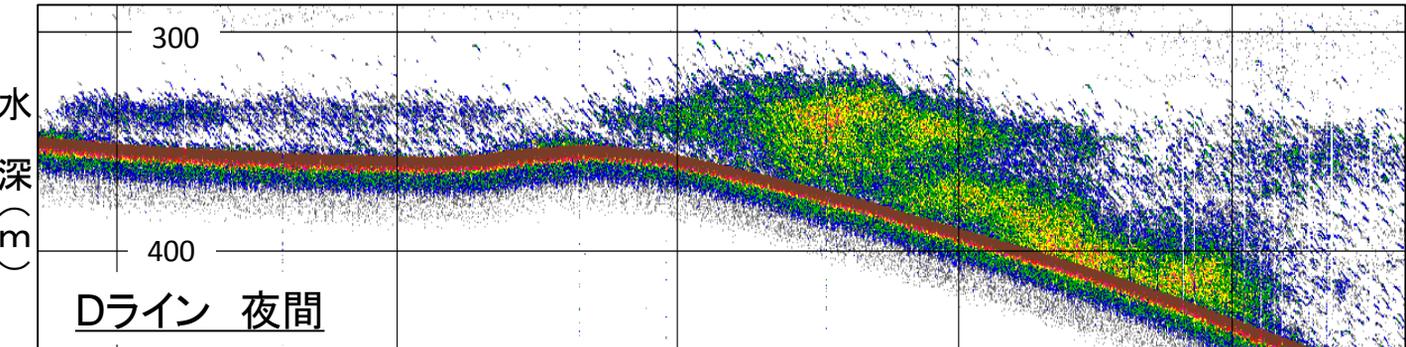
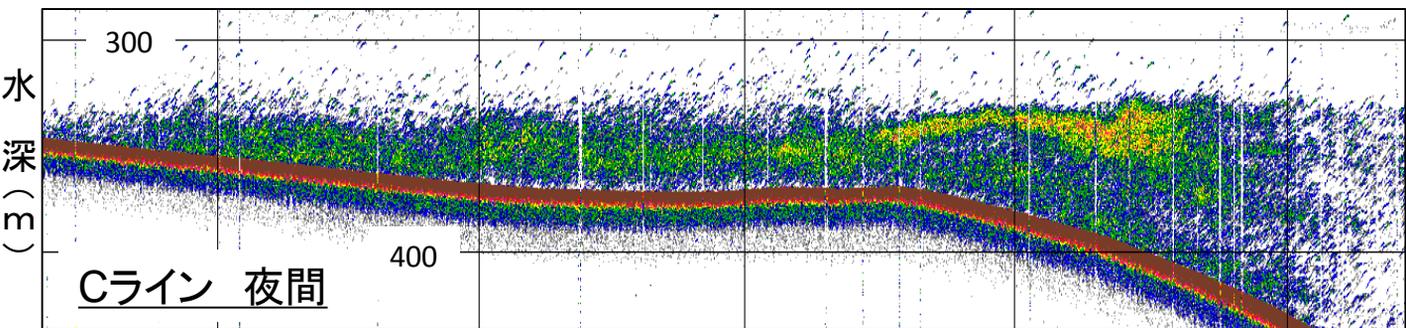


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

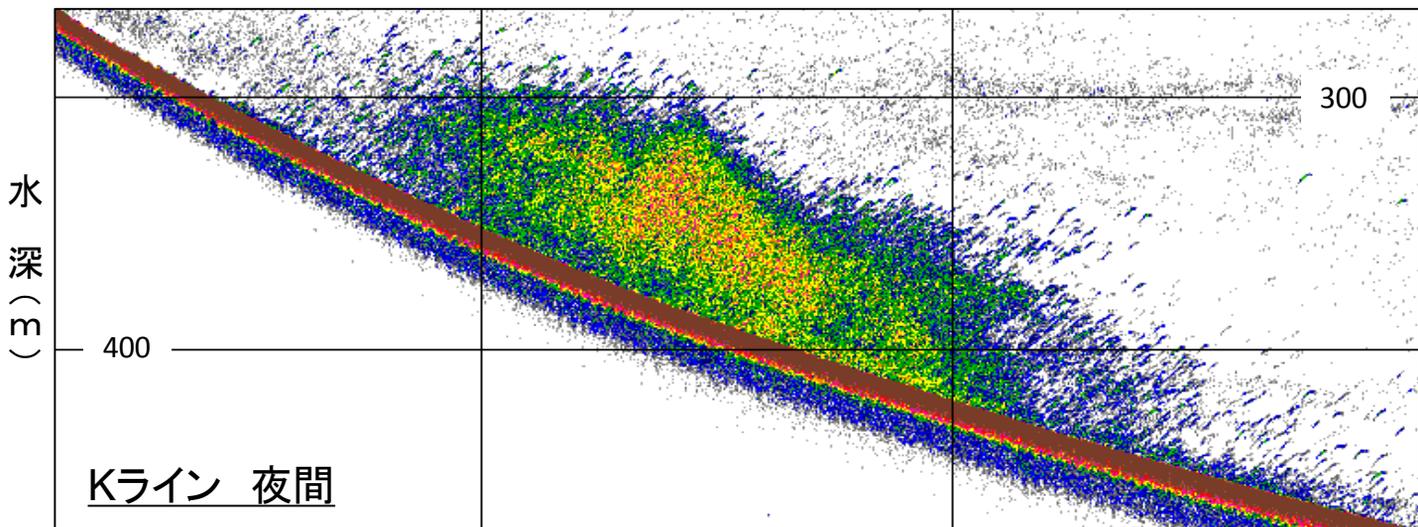
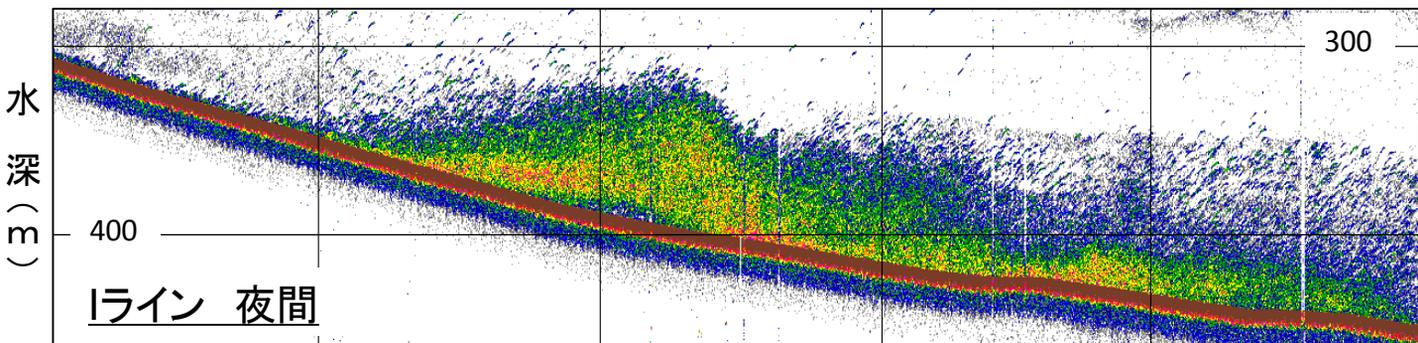
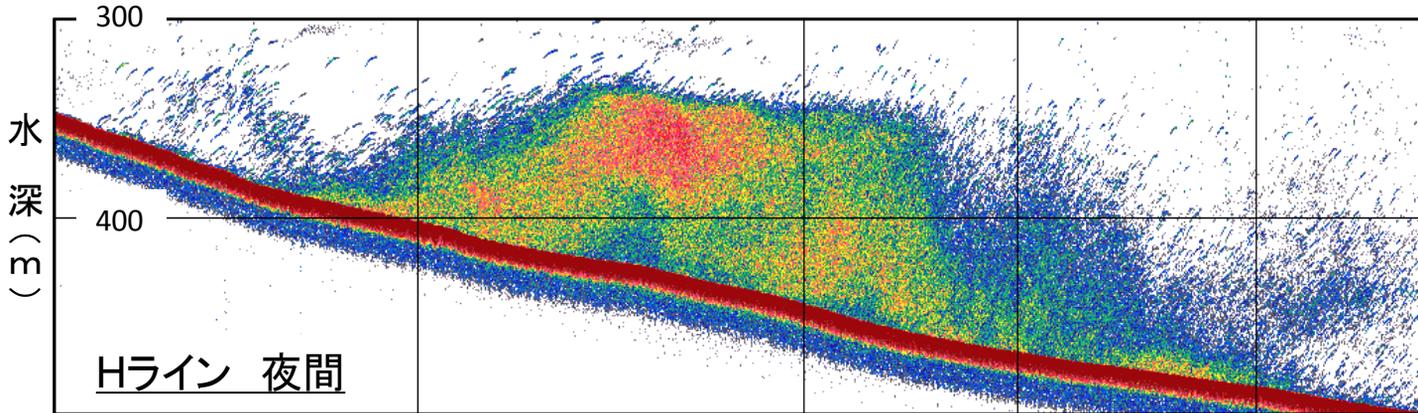


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m
 なお、水平ラインの間隔が異なるラインがあるのは、調査船の船速を変更したため。

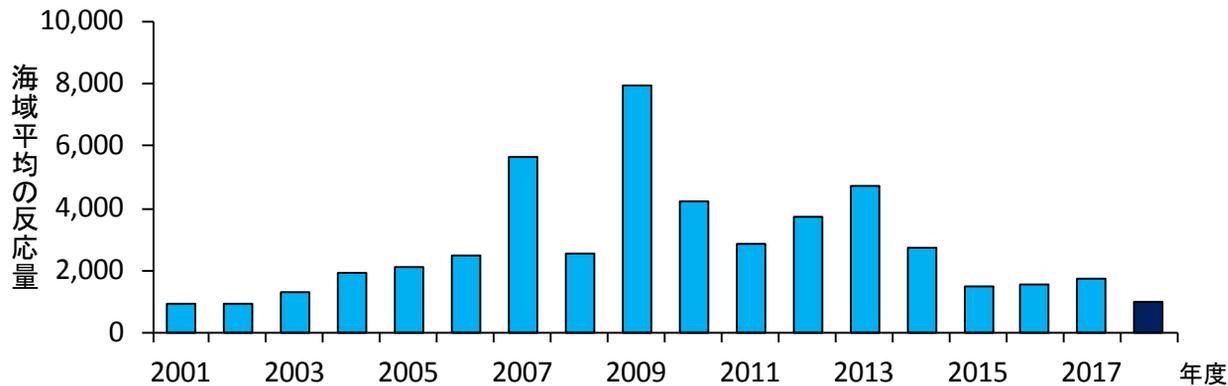


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

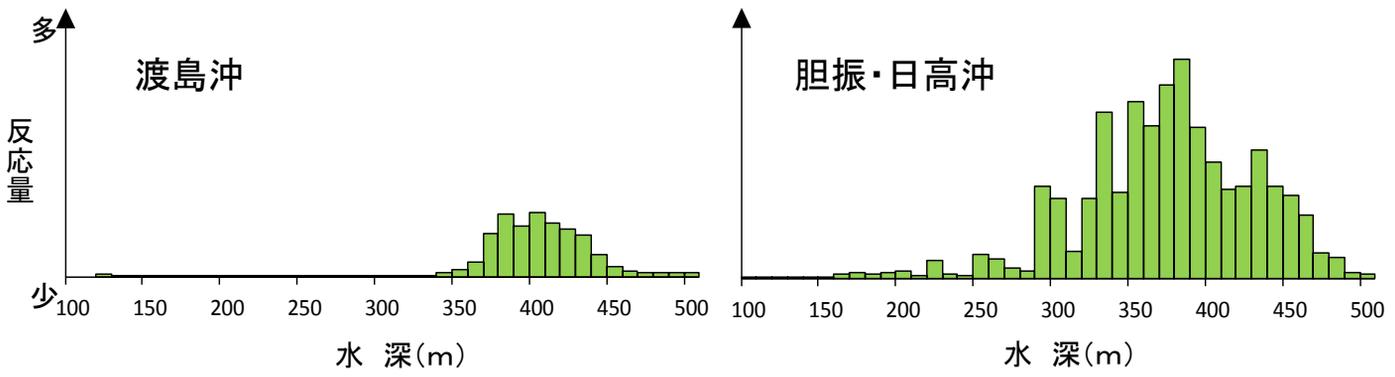


図4 水深別の平均魚探反応量 左:渡島沖(A~Fライン), 右:胆振・日高沖(G~Tライン)

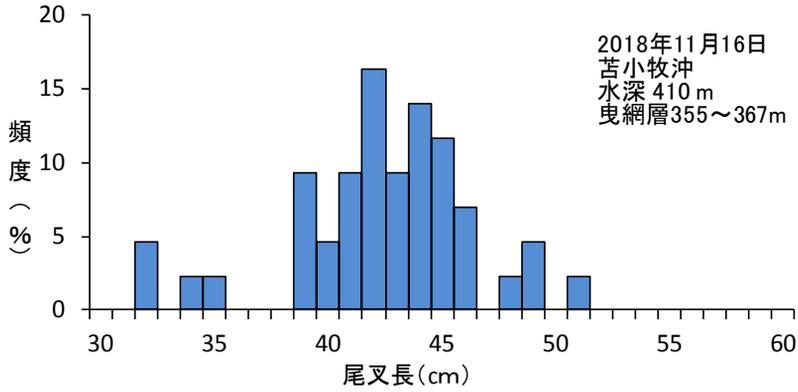


図5 中層トロールによる漁獲物の体長組成

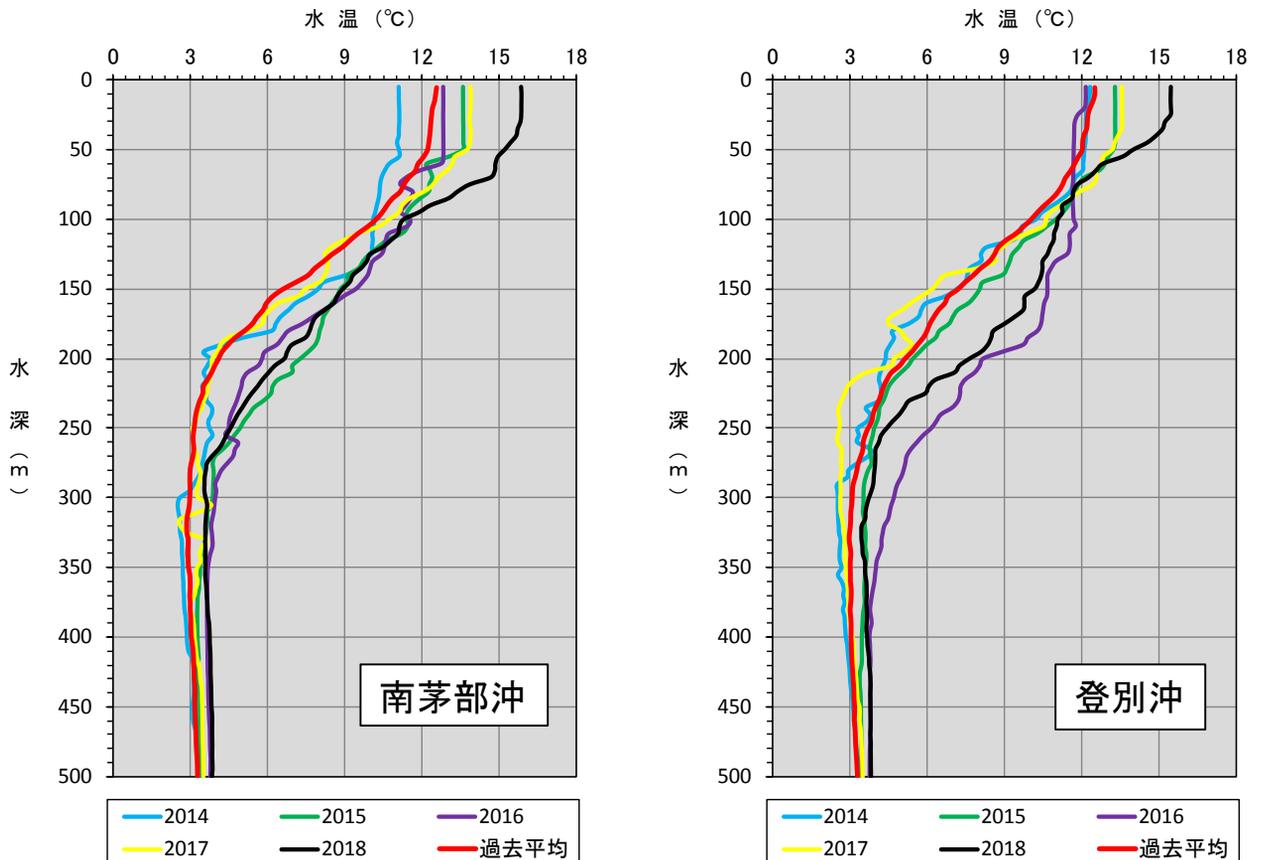


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42° ライン上), 右:登別沖(Hライン上) (過去平均:本調査における2002~2017年度のそれぞれの調査点の平均値)